

春は唐津秋は漆器

天領桜井より瀬戸へ乗り出す椀船

月賦払いひとつこうてや

今治さくらいの物語 桜井漆器

桜井漆器の産地である桜井はかつて江戸幕府の天領に指定され、御用米の運搬が行われていた。その航海術をいかした廻船業で、旧桜井港は海上交通の要衝として栄えた。漆器行商の始まりは文化年間(1804~1818年)頃とされ、運搬用の帆船は「椀船」と呼ばれるようになった。漆器専業となつた行商人は、春には九州地方の陶器を、秋には近畿地方の漆器を扱い、日本各地の港とのつながりを強めた。行商が軌道に乗り成功を収めると、最大の取引相手であった漆器の名産地、紀州黒江より漆器製造の技術を取り入れ、桜井で漆器製造を始めるようになった。その後、海南、輪島、山中、越前、会津など日本各地の漆器産地から職人を招き、優れた技術を導入したことにより桜井の漆器産業は急成長した。明治後期には、漆器行商を通して桜井の商人が月賦販売方式を生み出し、月賦百貨店も開業された。綱敷天満宮には肥前伊万里、衣干岩の横には紀州黒江の商人が寄付した灯籠があり、ここ桜井の港が九州や近畿へつながる玄関口であったことが垣間見える。